シンポジウム報告

資料と「私」

西井 美穂

はじめに

2011 年 12 月 23 日、私はアジア社会文化研究会主催の学生プロジェクト 2011 シンポジウム「資料から問い直す地域研究のあり方」に参加した。本稿ではセッション１「資料と向き合い、何を読み解くか」について報告し、報告者自身の資料との向き合い方について論じたい。

発表者の一人、ウクライナからの留学生コヴァレンコ,オレクサンドル氏は、五年間かけて翻訳した『信長公記』についての研究内容と、翻訳のむずかしさに言及された。もう一人の台湾からの留学生王薇婷氏の発表は、川端康成の『禽獣』を「空間」から読み解くという新たな方法により、川端の文学作品をより深く解明していくという内容であった。そのお二人の発表に則し、またみずからの関心から、「翻訳者として」と題してコメントされたのが崔真碩（ちぇじんそく）先生であった。コメントの中で、崔先生は、翻訳とは「ひとつのより大きい言語の二つの破片」（ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の課題」、野村修編訳『暴力批判論』岩波文庫、1994 年）という言葉を引用し、翻訳された作品はあくまで原作とは異なることを強調された。

こうした外国人研究者たちの異文化に向き合う姿勢は、現在ドイツの一思想家の思想と向き合っている私に多くを教えてくれたが、とりわけ一次資料とどのように向き合うかという点については、私自身考えを深めることができたように思う。

１．ルドルフ・シュタイナーの思想への視点

私は現在ドイツの思想家、ルドルフ・シュタイナー（1861－1965）の思想を研究している。シュタイナーという名は、日本においては教育学の分野で、個性と自由を理念としているシュタイナー教育として知られているが、その

思想は神秘主義であるため、学問的には評価が定まっていないというのが現状である。彼の主著『神秘学概論（*Die Geheimwissenschaft im Umriß*）』は、宇宙の進化と人間の意識の進化を結びつけて論じ、また多くの著作においても自然と人間の関わりを独自の宇宙論として展開していることから、シュタイナー思想になじみがない一般の人には、その思想は敬遠されている。ドイツでも、教育学の分野において、経験的実証的な「科学性」が重視されているため、見えないものをも実体があるとする「霊学・精神科学（Geisteswissenschaft）」に基づくシュタイナー教育学は、「非科学的」であると見做されているのである[1]。

しかし、こうしたシュタイナー思想を基盤とした実践活動は、教育のみならず建築、医療、農業などの分野において、自然との調和を重視し、環境に配慮したものとして広がりつつある。実践の基盤となっているシュタイナー思想は、果たして敬遠されるような思想であるのか。このような疑問から、私は、シュタイナー思想を神秘主義という狭い枠に閉じ込めるのではなく、新たな視座により分析することができるのではないかと考えた。その新たな視座を獲得するために取り組んだのは、シュタイナー思想の代表作とされている神秘主義的傾向の著作のみならず、これまで看過されてきた初期の哲学的著作や教育など実践的な著作も含め、シュタイナーの著作に通底しているものを探求することであった。その結果見出したのが、人間は利己的であるが、利己主義を土台にして「道徳的精神的（moralisch-geistig）」[2]生き方を選択することができるのも人間であり、そのためには一人ひとりが自らの力で「Ich（自我）」を成長させなければいけないという彼の信念であった。

２．対象に向き合う「私」

このように、シュタイナーの思想において、「Ich（自我）」は最も重要であったが、その「Ich」は、個々の人間の中の、他者が介入することができない神聖な場であると同時に、成長することで他者と協働し、他者を理解する場にもなるものであった。「Ich」は、和訳すると「自我」であるが、「私」でも

ある。「Ich」を成長させるということは、「私」が、他の「私」と繋がることである。シュタイナー思想における「Ich」は、このような性格をもつものであるが、実はこの「Ich」を明らかにすることは、シュタイナー思想と向き合う私個人においても重要な課題であった。

シンポジウムでは、『信長公記』をウクライナ語に訳されたコヴァレンコ氏が、「訳しているうちに、自分が『信長公記』を著した人物であるかのような錯覚をおこした」と述べられた。コヴァレンコ氏は、その対象と一体になって作者の世界に入り込み、あたかもその時代に生きているかのような感覚を持たれたようであった。その一方で、コメンテーターの崔先生は、翻訳者と原作者の紡ぎ出す世界は全く異なっていることを指摘され、例えば、原作者は、翻訳者が抱える悩み――両方の文化のギャップを理解し、どのような言葉で置き換えていくかという――を持っていないことなどもあり、当然その世界観は異なるという見解を示された。コヴァレンコ氏が、翻訳者の立場のみで語られたのに対し、崔先生は、翻訳者の立場から一旦離れ、原作である資料と翻訳したものを比較して、研究者として発言されたのである。しかし、私には、コヴァレンコン氏も、崔先生も立場は異なるが、真摯に資料と向き合い、それぞれの「Ich」「私」から発言をされているように思えた。コヴァレンコ氏の「Ich」「私」は、それまでの自分が消え、対象と同化し、同化した自分を意識しているものであり、崔先生の「Ich」「私」は、恐らく対象との同化を経験された後、翻訳作品を原作と比較する客観的な目が包摂されたものであった。それぞれが明確な「Ich」「私」を所有されている。

私自身は、一次資料を何度も読み返すうちに、知らず知らずのうちにシュタイナーの影響を受け、シュタイナー的なものの見方に同化し、「Ich」「私」の視点が消えてしまっていたのである。対象に一旦のめり込んだとしても、再び「私」を対象から引き離し、今度は「私」自身の目でもう一度理解した思想内容を検討する必要があった。

３．「私」であるということ

「ひとつのより大きい言語の二つの破片」という一文は、成長し、他者の視点をもつ「私」になることの重要性を改めて私に認識させてくれた。時代も文化も異なる場に生きている翻訳者、あるいは研究者は、対象となる資料の時代や文化にどれだけ近づいたとしても、その翻訳者、研究者なりの生きている時代や文化、個人の知識や気質など、全人格により対象を認識しているのであり、訳している本人にはその自覚はなくても、翻訳された作品は自ずとその翻訳者の作品となり、研究成果はその研究者の人格を現すものとなっているのではないだろうか。

今回のシンポジウムは、私自身が、資料とどのように向き合っていくかを考えるきっかけとなった。資料と向き合い、資料と一体になることで、一旦消えた自分は対象から離れた「私」となる。それは、対象と同化した自分を内に取り込んだ「私」である。「資料と向き合う」とは、こうした内的なプロセスを経験した「私」になることであった。

このシンポジウムで学んだことを、今後の研究に生かしていきたい。

註

[1] Ernst-Michael Kranich, Lorenzo Ravagli, *Waldolfpädagogik in der Diskussion—eine Analyse eirziehungswissenschaftlicher Kritik—*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1990, S. 7, S. 60. 衛藤吉則「シュタイナー教育学をめぐる『科学性』問題の克服に向けて――人智学的認識論を手がかりにして――」『人間教育の探求』ペスタロッチ・フレーベル学会編、1997年、第10号、101－115頁、114頁。

[2] Rudolf Steiner, *Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik*, Dornach, 2005 (9. Aufl.) 71.-77.Tsd., S. 21.

（mihonisi@mocha.ocn.ne.jp）